29amF-281

多剤処方における副作用重複評価ツールの開発と副作用回避に向けた応用

野呂　未希子[1], 矢作　萌恵[1], 浜田　康次[2], 川上　準子[1], 星　憲司[1], 青木　空眞[1],
○佐藤　憲一[1]（[1]東北薬大, [2]日医大千葉北総病院薬）

【目的】多剤処方ではほぼ処方薬剤数に比例して副作用発現が起きやすいことが報告されている。それゆえ、副作用発現頻度まで考慮して副作用の重複を手軽に評価できるツールが必須である。添付文書（PI)）の副作用発現頻度をスコア化することで、処方全体での発現頻度をスコアの加算値から近似的に評価して臨床応用を図る。薬剤のレセプター結合占有率（ϕ）を使用することで、投与量変化に伴う副作用発現頻度変化の評価や、PI では「頻度不明」と記載された場合での頻度評価も試みる。開発したツールの臨床応用を試み、スコア加算の有用性を評価した。

【方法】600 余の薬剤につき、PI の副作用情報は PMDA より半自動でダウンロード、また、副作用発現のスコア化は副作用 SOM の研究で得られたものを使用して、一部は手作業によりツールへの入力データを揃えた。Visual Basic を使用してデータの処理を行い、対象となる処方で得られたあらゆる副作用のスコア加算値はツールに瞬時に表示させる。

【結果・考察】本ツールの開発により、従来は困難であった多剤処方の副作用発現評価が容易になった。「転倒」、「錐体外路障害」の副作用発現が時系列で報告されている各々11 剤、9 剤の多剤処方例につき、「転倒」にはめまいなど関連する 9 項目、「錐体外路障害」では振戦など関連する 13 項目の副作用を用いて、処方変更に伴うスコア加算値の変化と報告されている副作用発現の時系列変化を比較した所、ほぼ同様の変化が見られたことから、スコア加算による予測の妥当性が示唆された。さらに、「転倒」のスコア加算値を低下させる同効代替薬の検討が容易に行えたため、副作用発現を回避する代替薬探索にも有用であると示唆された。